相愛大学人間発達研究所主催

わかぎゑふ講演会

自己紹介～相愛時代

初めまして，わかぎゑふと申します。こんにちは，今日はようこそ。めっちゃ恥ずかしいんですけど，私，相愛の出身でございます。今から33年前に高校を卒業したので，津村別院に来たのは33年ぶりだと思います。先ほど相愛の中学・高校の校長先生がいらっしゃいまして，今の相愛の冊子をいただきました。ものすごく劣等生だったので，これをいただく権利は全くないという感じなのですが，ありがとうございました。「日々の糧」もいただきました。相愛では毎日読むものですが，言葉が易しくなっていてホッとしました。33年前の記憶でよく覚えてないのですが，私たちの頃は，多分1日目には“自己こそ自己の主なれ”と書いてあったと思います。何のことか，当時は全く分からなかったんですが，簡単ですよ，自他共に如来の一子なりということです。よね？

チャロの話よりも自分の話を先にさせてもらいますが，私は大阪のど真ん中，玉造で育ちました。子どもの頃はスポーツ少女でして，スポーツの学校に行こうと思っていたのですが，昭和45，46年のやんちゃな小学生だったので，男の子と駆けずり回ってケンカばかりするようなお転婆でした。ある日，男の子とケンカをしたら大けがをしてしまい，父親に呼ばれまして，「いい加減にしいや。女の子らしくしなさいよ」ということで，ともかく女子校に入りなさいと言われました。我が家から歩いていける範囲に，たくさん女子校があったのですが，「近くの学校はいややな。学校には電車で通いたい」と思っていたので，「電車で行きます」と言ったら，「森ノ宮から本町がちょうど3つ目の駅で，（相愛は）ちょうどいいやろ」ということになり，相愛に決まったんです。

女子校がどんなところかも知らないまま入学したんですが，最初の日。多分この津村別院でオリエンテーションをしたのですが，「男の子おれへんやん」と驚きました。それで，生まれて初めて女の子の友達が出来たんですが，そのうちの一人が絵を描いていたんです。今も親友で，谷口郁代という人です。彼女は絵も描くし，ピアノを習っていて特設科でした。私と違って相愛に入るべくして入ったという人でしたが，そんな友人が「絵を描いてみる？」と誘ってくれました。それまでスポーツしかしたことがなかった私も「描いてみよかな」と興味で描きはじめたんです。ところが，これにハマりましてね。絵を描いていた時が，ちょうど少女漫画が上り調子やった時でしたから。なんせ中学一年の時に「ベルサイユのばら」が始まり，ちょうど高校3年の時に終わったという奇跡の年代ですから。もちろんまだまだ，漫画を描くなんて何事やという大人も沢山いましたけどね。先生の中にも認めてくれる人は認めてくれましたが，「漫画家になります！」と言うと，「お前，何を言うてんねん。ちゃんと短大に行け」と言う人もいました。でも，私は基本的にひとつのことに頑張る体質だったんで，学校を頑張らないで，勉強をする暇がないほど漫画を描いてました。

ところで，相愛というところは中学生でも大学生の文化祭に行っても良かったんですね。今もそうでしょうか？私の中学生の頃はそうでした。中3の時に短大から教育実習に来てくれた先生が誘ってくれて，短大の文化祭に遊びに行きました。その時，校庭で手書きの本のしおりを売っている方がいて，その絵に見覚えがあったので「これ描いた人誰ですか？」と聞きました。すると目の前にいたのが描いたご本人で，若木元子さんという，相愛の短大生だったんです。彼女は【りぼん】という少女漫画の雑誌に投稿した作品が入選したばかりの，漫画家志望の私にとっては，いわばちょっとしたスターでした。「この人や！」と思って，その先輩を捕まえまして，相愛の中で漫

画研究会というのを申請して作ったんですよ，中学三年生の時に。私が高校三年の時には，クラブになってましたけど。まあ何人か集まれば部活動にしてくれる時代だったので。そうやって学校の縁で，若木先輩に絵を教えてもらったりしてました。この方が漫画を描きながら演劇をしていたんですね。はっきりいって彼女のせい？おかげで，私はいま演劇で食べているということです。あの当時，先輩が「お芝居やるから手伝ってくれへん」と言うのでお手伝いに行ったのが，“少女漫画フェスティバル”という集まりでした。先輩は漫画が原作の芝居に役者として出演していました。私はセットの色塗りを手伝いに行ったんですが「役足りへんから出る？」って言われて，結局出演しました。それこそ漫画の中でよくあるじゃないですか，そういうこと。肩をポンポンと叩かれて，「キミにぴったりの役があるよ」って言われて，スターになっていくっていう話が…ま，私はとんでもなく普通の役でしたけども。それがきっかけで，絵の世界からお芝居っていう動き出す世界にハマりました。その後も絵は描いていたのですが，相愛からはただ一人デザイン学校に入りました。卒業後もグラフィックデザイナーをやっていましたが，もうちょっとお芝居をやりたい，芝居の勉強をしたいなと思いまして，二十歳ぐらいの時に東京に行き，演劇の勉強をしました。しているうちに絵を描いていた私は，なぜか字を書くようになりまして，今は脚本家という仕事をしています。もちろん劇団もやっていますが，役者をやっていたら本を書く人がいなくて，本を書いていたら演出する人がいなくて，演出を始めたっていう感じなんですけども。ちなみに“わかぎゑふ”という名は，相愛時代の若木先輩の名字をいただいたものです。先輩は三姉妹で，みんなご結婚された後でお父さんにお会いしたら，「あんただけが若木っていう名前なんやで」って言われので，「じゃあ，もうやめられへんな」と思い，34年ほどこの名前を使わせてもらってます。そんなこともあり，すべてのきっかけは相愛で，相愛に入らなかったら，絵も描いてないし，脚本も書かなければ，演出もしてなかったと思います。多分体育の先生になっていたと思うんですよ。180度変えていただいて本当に縁を感じると同時に，ありがとうございます。

日本には劇作家協会というのがありまして，会長は，今年お亡くなりになった井上ひさし先生，東京の方ではいろいろ活動しています。大阪で「劇作家協会に入っています」と言うと，だいたい「劇作家？　吉本の？」と言われますけどね。お芝居は難しいと思われていますが，そんなことはありません。関西ではまだまだ認知されてない職業の一つですね。

チャロ誕生の裏側

私が書いているお芝居の中では，NHKで書いてる「リトルチャロ」のような完全なサクセスストーリーはほとんどありません。ああいうかわいらしいお話も書いたことがありませんでした。きっかけは，NHKのプロデューサーから一本のメールが来たんです。ごく簡単な内容で「NYで迷った子犬が帰ってこれる話を書いてみませんか？」とだけ書かれてありました。ちょうど芝居の稽古中だったのですが，その簡潔なメールになぜか心が動き，長野真一さんという方に会うことになりました。劇団の稽古が22時くらいまであるので，それ以降どこかでお会いできればと返事して，結局，森ノ宮の駅でお会いしたんですね。でも森ノ宮の駅周辺には夜開いてる喫茶店がなく，「しょうがないのでここに入りましょう」と居酒屋に入りました。名刺を渡す前に「ほろ酔いセット二つください」と，ビールで乾杯しながら初めてお会いしたんです。で，彼がNHKにメディアミックスという部ができるという話をしはじめ，それがリトルチャロが作られた最初のきっかけでした。「メディアミックスというものを作るので，そのアイドルを作りたいんです」とおっしゃったんです。メディアミックスが何かというと，テレビとラジオとテキストとインターネットと出版物と，全部同じネタで一緒に展開する初めての企画だったんです。それまではテレビはテレ

ビ，ラジオはラジオと，みんなバラバラで動いていたんですけども，一つのお話で全部を回すという大きな計画でした。ただ最初に長野さんにお会いした時は「今はまだ何も決まってないんです。メディアミックスができるかどうかも今からでして」と言ってました。2007年7月のことです。「できるとしたら7月中に必ず決済がおります。」「ああそうですか」「でも，7月中に50話はいるんです！」「えっ！？7月中に50話いる！？」。そこでやっとこれはえらい大変な話だなと思いました。でっち上げでも50話書かないといけないなんて，やったことなかったですから。もちろん書いたんですけど，あの時私のカンは間違っていたのかなと思います。最初は「チャロというものを想像しながら最初のストーリーを作ってくれる人，と思って依頼します。まだ絵も決まってないんですよ。」と言われました。何もなかったようなものです。名前も最初はチョコという名前だったんです。日本で飼われている犬で一番多い名前がチョコらしく，チョコにすると言われていたんですが，名前が決まりかけると，弁護士の人が全部調べてくれるんです。「チョコはダメです。もういます」と。どこかで使われているらしくて，そこから二転三転して名前が決まらずに，主役の名前が決まらずに数ヶ月が過ぎていきましたね。相手役のキャンディとかはすんなり決まるのに。「なんでキャンディはよくて，チョコはダメなんですか？」と聞いたんですが，『リトルチャロの～』という商品を，メディアミックスで売り出す時に，そこに版権が生じると言われまして。最後まで主役の名前が決まらなくて困りました。どんなに考えてもどこかに出ているんです。でも，7歳の男の子が拾ったって，そんなカッコイイ名前付けるか？ということになってきて，最後に「耳が白と茶なんで茶白でチャロはどうですか？」となったら一発で通りました。今ではチャロと耳慣れしているからいいんですけども，最初はこんな名前でいっていいんかいなと…。

おかげさまで2008年に一年間やりまして，なぜかNHK会長賞をいただきました。次の年に終わって，今年は新しいシリーズができているわけですけども，語学部始まって以来のアイドルに変身しはったわけです。私がこの仕事を決めた大きな一つのきっかけは，NYで迷った子犬が単にNYに住む，英語を覚えていく，という語学番組なら多分お受けしなかった。多分最初の条件に，帰ってこれる話にしてくださいとあったんです。これは多分奇跡が起きないと帰ってこれない，と思って，書く側の私のカンみたいなものがくすぐられたのは確かでした。犬はやっぱり人間とはしゃべれませんからね。それをどうやって帰すんやろう。最初にこれはうまいこといったらうまいこといくなーと思ったんです。おかげさまでうまいこといったんですけどね。ありがたいことで，帰ってくる話がNHKの上に通りまして。で，50話書いていったんです。

初めは，やれるかどうかも分からないまま50話を作っていたので，途中から「こんなキャラクターどうですか。あんなキャラクターどうですか」と犬のことを調べたりとか，長野さんとたった2人で作っていきました。今は50人くらいのスタッフがいて，すぐに何でも調べてくれる状態なんですけども，最初は何もなかったみたいなものでした。それでも少しずつメンバーが増えていったんですが，一番残念なエピソードは，NYに行ったことのあるスタッフが一人もいなかったことです。チームの中でNYに行ったことのあるのは私だけで，しかも2007年の4月に，ミュージカルの取材で1週間連れて行ってもらっただけ。自分の足で歩いたわけではなく，ただ車に乗せられて劇場に連れて行かれてインタビューした，という仕事だったので，ほとんど自力で地図を見て歩いてないのが事実でした。なので，チャロが最初に迷う場所も，チャロが一番最初にエサをもらう「アミーチ」というイタリアンレストランも，全部私が泊まった70丁目辺りのことです。NHKさんとは「NHKではこれを取材するために3日くらいNYに行けないんですか？」「行けません」「誰か行っていただくわけにはいかないんですか？」「行けません。まだメディアミッ

クス部ができるかどうか分からないので予算が下りません」「私の記憶だけでいいんですか？」「いいです」なんてやりとりもしました。本当は朝日放送から連れて行っていただいた仕事だったんですけど，朝日放送に頼んで「ミュージカルの取材で泊まった場所を教えてくれる？」と聞いて，地図を見て，だいたいどこに何があるか確認して始まったんです。

始まったら，最初に大問題がおきました。実はNYには野良犬はいないんです。NYでは野良犬がいたら，それ専用の警察がすぐに捕まえて保護施設に入れて，もらい手を決めるシステムがあるんです。だから，ドレッドなんかおるわけがない。これをどうしましょう？と。「しょうがないですね。では，嘘で」「嘘でいいなら別にNYでなくてもいいんじゃないんですか？　野良犬がおる国というのではダメなんですか？」「英語の番組なので，NYということで」。そこは決まってるわけです。しょうがないのでNYに野良犬がおることにしました。なので，ここが根本的な嘘なので，皆様だまされませんように。NYにあんな犬おりませんのでご心配なく。NYの話をどんどんしていくことになって，NYからともかくチャロを帰るようにしなければならないので，最初はロードムービーみたいに，西へ西へ来ればいいんじゃないかと。ロスまで来たら旅をする話にしようと言ってたのですが，調べる方が追いつかなかったんですね。「シカゴまでしか調べられません」と言われまして，仕方なく一番近い都会へ行った。この時も大問題が起きまして，キャンディという，お金持ちの犬と仲良くなる。この犬の飼い主がシカゴに大邸宅があって，そこへキャンディが行くので，ついでに西へ行くチャロは，乗せてもらうことになったんです。これを，1本目は東大出身の佐藤先生という方が訳してらっしゃって，佐藤先生が会議で「絶対にNYからシカゴに車で行く金持ちはいない」と言い出されて。「ああ，そうですか。リムジンとかいませんか。ああ…。でも，チャロはリムジンに飛び乗りたいんですけど，ありえないですか。ああ…。えっと，お金持ちは何に乗るんですか？」「自家用ジェットです」。それを本気で言うてはるから。「どうしたらいいと思います？先生」「そうですね，リムジンに乗るのは中流の金持ちですね。シカゴにそんな金持ちはいませんから，書かれるとまずいですね」。そんな風にえらいこだわりはるんですね。「どうしたらチャロはリムジンに乗れるんでしょう？チャロは自家用ジェットに飛び乗るわけにはいかないから」「じゃあ，そのお金持ちが変わり者ならば…」「じゃあ，変わり者にします！」。すごいですね，メディアミックスって。知らない国の話を日本ででっち上げるという。いろんな支障があるもんだなと思いました。そんなつまずきエピソードがたくさんある中，チャロは始まったわけです。そしてやっと絵ができてきたんですが，これがなかなかうまくいきませんでした。最初は豆柴みたいな，日本の犬と一目で分かるのがいいんじゃないかと。外国の犬としゃべらすのも，明らかに外国の犬からしたら，「どこの犬だ」「日本の犬です」と，そんな犬がいいんじゃないかと言ってたんですが，絵にすると可愛くないんですよね。賢そうな感じで，泣いてもあまり可愛くない。仕方がないので，だんだん絵が変わってきまして，今の絵になったわけです。これを描いている人は，若いデザイナーさんで女性なんですが，彼女は他のお仕事をしたことがなく，偶然描いたチャロが，すごく可愛かったので採用したんですね。デザイナー会社に就職してすぐに1年間ずっとチャロを描き，2年目もずっと描いているんで，チャロ以外の仕事をまだしたことがなく，チャロ専門の画家になってしまったようです。簡単な絵なんですけども，彼女は本当に愛してくれているし，自分のキャラクターで初めての仕事が，日本中で上演されているので，ものすごく思い入れがあるんですよね。だから同じ会社の人がチャロを描いても全然可愛さが違うので，彼女だけの仕事になっていて，他のスタッフが入ってきても，チャロを描くときはわざわざ彼女を呼んで…という状況になっています。私も昔はデザイナーをやっていましたが，仕事をして最初の年

に，そんなにラッキーではなかったので，純粋にすごいなと思います。2011年から2012年にかけて小学校で英語の授業が実際に始まるので，そうなるとNHKとしては，そこまでチャロを引っ張って，そのままチャロの語学番組を作りたい，チャロが人気者になっていってくれたらいい，と思ってらっしゃると思います。そうするとチャロを描いている彼女は，一切チャロ以外の絵を描けなくなるというわけで，ちょっとかわいそうですかね。

チャロの話はなぜ人々に受け入れられたか

チャロを描く時，最初にNYから人間の手によって日本へ帰れる，として作ったんですけども，これだけだと，ものすごく単純なものになってしまうので，チャロの性格をどうしていくかという話になったんです。チャロの性格を単に可愛くて，かわいそうで，日本から来た子犬なのに迷って，とみんなが同情してくれるだけではおもしろくないので，チャロが来たことで，みんなが影響されるような話にしていこうと思いました。最後にトモコという女の子に拾われるですが，このトモコには夢があって，脚本家になりたいという夢があるんですけども。この子が有名な役者の娘で，お父さんの映画の脚本を書くという段がありまして，そのお父さんのモデルは渡辺謙さんです。渡辺謙さんならレッドカーペットの上を歩いていて，子犬を拾ったら当然テレビに映るだろう。で，それを映していたカメラマンが，チャロの飼い主の翔太くんのお父さんだったら帰れるんじゃないか？と考えました。だから，最後は人間に拾ってもらわなあかんいう話になるんですけども。その時に，単にチャロが身内のお父さんのところに走ってくるんだとおもしろくないので，一旦自分の夢をあきらめて，トモコのためにがんばるということにしたんですね。そこがこのリトルチャロという物語の一番成功したとこでした。自分を飼ってくれたトモコのために，自分が本当は日本に帰れるチャンスがあったのにあきらめてがんばる。そうしたら偶然自分も帰れることになったという，二重の構造です。それが一番ヒットした理由だと，NHKでは言われてます。チャロの性格を，人のためにがんばるというよりも，自分を愛してくれた人のためにまずがんばる。自分の夢自体はあきらめなければいけないけれど，まず恩を返さないわけには，自分も素直に帰れないと思う気持ちが強いことにした。そういう性格を決めた途端に，他のセリフがほとんど決まりました。チャロの影響力で，他のキャラクターもほとんど決まっていった。他の人たちも「なんでお前，人のためにがんばるねん」というセリフがどんどん出てくるので，その関係性がすごく作りやすかったのと，あとはアメリカの犬なので，やっぱり合理的な犬を作ったんですね。自分の夢のために自分ががんばればいいじゃないかという合理的なことをいう犬を作っていって，チャロがなぜ人のためにがんばるのかという会話をさせているうちに，チャロ自体の日本人性とか，子どものピュアさに影響されるおじさんたちとか，過去を見ていく人たちができて，なんかうまく回り出しました。でも，大きなチャロの性格の根本を作っているのは，やっぱり私たち日本人の考え方というか，東洋人の考え方なんですよね。愛してくれる人のためにがんばるとか，人のために恩を返すというのは，私たちが自然に学んだことであり，私とかはここの学校で自然に受け継いだ言葉やったんやろうなと，改めて思いました。もともと普段は日本のお芝居，日本の人情劇とかを書いていて，あまり外国の人との考え方の違いとかを書いたことがないので，チャロ自体が私の中でいろんなことを教えてくれたなと思います。

2作目のチャロと相愛で学んだこと

一本目がこれで，二本目を今やっているんですけども，会議では，二本目はもっと劇的にしなきゃいけないね，ということになりました。今は飼い主の翔太君が怪我をして，冥界に行ってるんです。冥界とは天国でも地獄でもない，まだ死んではいない人たちが行く世界で，そこでチャロがいろんなことをして，今度は翔太を自分が連れ戻し

て，この世の中に帰ってくるという。あ，言っちゃった。帰ってくるのは当然ですよね。その中のセリフが，まずどこの宗教にも影響されないように書かないといけないので，天国や地獄という言葉も使わず，世界を全部作り替えなきゃいけない。NY は NY という街があれば良かったんですが，どんな世界にしてどうするのか，最初の世界観を作るのが，ものすごく大変だったんです。これは SF を作れと言われてますか，という状況だったんで。おる動物も犬だけやったらおかしいよなと。ペンギンとか，いろんな動物が出てくるわけですが，それをどうやって動かしてどうやって使おうかと，人間も出てきますし。「英語はどこでしゃべるんですか？」「冥界は英語でいいです」とか，そんな状況から始まって，じゃあ冥界の扉はどんな形にすんねんと。飛行機なら飛行機の形をしてますが，冥界の地図から始まって，どうやって作るか。川はどうやって作るかとか，1本目の時よりも3倍打ち合わせにかかりました。もちろん絵を描く人も「どんな街ですか，冥界って？」と聞くわけですが，分かるわけないやんと。「冥界言うたん，私ちゃうで」と，そんな会議がいっぱいある。今はもう，パックンというアメリカ人が翻訳してくれるわけですけども，彼はアメリカの学校でも，かなりスピリチュアルなものを勉強したらしく，こういう日本の精神世界の話を，英語の教材としてぜひ訳してみたかったと言ってきてくれたんです。で，その彼がミドルワールドという中間の世界という言葉を作り出して。死んでしまうまでと現世の間という世界で，人の精神世界になっているんですけど。今はそこでチャロが色々迷ったり，本来死んだはずのお母さんに会えたりとかして，えらいことになっております。もう正直に言いますが，相愛に来てなかったら，これは書けなかったです。ありがとうございます。相愛学園を卒業して33年経ちますが，始めて宗教の本を引っ張り出してきまして，宗教の授業をろくに聴いてなかったのが丸バレでしたが，「ああ，仏教ってこんな考え方をしているなら，これはありかな」と。その時思い出したんですが，この学校で一番印象的だったのが，「仏教では，愛も欲だと言っているんだよ」と，井上一郎という先生がおもしろい授業をやってたんです。お坊さんで，キリスト教やイスラム教との違いなど，子どもにも分かりやすくしゃべられる先生で，その時の，人との考え方との違いを思い出して，とっても勉強になっていたんだと思います。今日はお礼を言いにきたようなもんで。私たちの中では，チャロ2のためにありがとうございました。

で，チャロはこの後，1本目で死んで泣く泣く別れた犬がいるんですけども，そのドレッドと再会したりするんです。あの世なら会わせられるやんと。そのこともお愉しみくださいませ。でも，日本人だからとか外人だからとか関係なく，精神世界を描くのは，エンターテインメントになるかどうかなので，単に難しいこと書いても，カワイイ子犬が難しいことを言い出してもしょうがないので，エンターテインメントにするためのセリフをどうやって作るか，すごく勉強になりましたし，自分たちのやっている芝居は，どっちかというと大人の見る芝居なので，多少皮肉も書いたりするんですけども，子どものために書いていると思うと，その辺がストレートなことも投げられるので，自分の中ではこの3年間は新しいことも書けて，新しいものと触れ合ったなと思っています。それはこの学校に来たことで，絵を描いていた人が演劇をやっていて，演劇をやっているから私も演劇にハマっていって，演劇をやっていたから，この脚本も書くことになってと，自分が思考しているというよりも，とにかくやってみるか，という縁の中で，だんだんゆっくり螺旋階段を上るようにおもしろいなと思って。これで仕事にしたいなと思う気持ちと，一緒に上がってくるものが縁なんやなと。本当に断ろうと思っていた仕事の中から3年も続き，こうやって皆さんと出会えることが縁なのだと思っています。ずっと点が線になっていくようなもので，仕事がずっと成り立っているんです。私の仕事の多くは，偶然性のなすものなので。

大阪人気質

ずっとOLもやっていたんです。電気図面が描けるということで，この近所の長谷川工務店で働いていたことがあって。長谷川工務店の中で2年ぐらい。東京で働いていた時と大阪で働いていた時があって，全然違いますよね。まず芝居の勉強しに行くために東京に行って，食えずに働いていたわけですが，こっちに帰ってきて長谷川工務店で働いて。大阪では「女の子がかわいそうに」というんですが，東京では「何，芝居やってんの。そりゃ食えないよね」って言われるんです。大阪は「女の子やのにかわいそうに」って，まるでおばちゃんみたいに言うてくれる。なんて人間味があるんやろうと思いました。

帰ってきたのが85年の8月で，忘れもしない阪神が8年ぶりに優勝した年。5年前に東京へ行った時と，5年ぶりに帰ってきた大阪は全然違うわけですよ。まず，梅田で友達と待ち合わせをして東京から帰ってきたら，阪神ファンが踊ってたんです。なんで？と思いましたよ。根本的にお正月しか帰ってくる時はないですから。阪神ファンが踊ってようが踊ってまいが，夏に帰ってきたのは初めてで，「5年前も踊ってたか？」と。多分勝った日だと思うんですが，みんな踊って歌って，ハッピ着て踊っているんです。「ハッピ着てる人が梅田中にいていいの？」と友達に聞くと「当たり前やん」と。東京ナイズされた頭の中では考えられない土地だなと。歩いている人がみんな聞くわけですよ。「今日勝った？」「勝ったでー」と。この人たちは知り合いじゃないよね，と。ちょっと引いて大阪を見ると，この人たちおかしいなと改めて思いました。そして改めていろんなことを発見しました。例えば，私の友達の山本能楽堂の能楽師の着物を着た男が，天六辺りを地図を持ってうろうろしてたら，3人ぐらいのおばちゃんが見てるんです。だんだんおばちゃんの視線を感じるから，「教えていただけ…」ぐらいで「はいはいはいはいはい」と教えてくれた。「すごいな。京都の人なら『こういってこういってこういくけど，遠おっせ』っていうのに」と言われて，「ああせやね。でもやっぱり変わっていると思うよ。大阪は」という話を，この間したばっかりです。本当に熱いというか人懐こいというか，とってもいい田舎ですよね，大阪って。都会のふりした田舎やなと思います。ヨーロッパに行くと，街々が一つずつ田舎じゃないですか。基本的には古い街でその街を愛していて，その街には好きなサッカーのチームがあるようなところが，大阪と同じにおいがするので，ヨーロッパに行くと，なんかホッとするんです。けれど，東京へ行くと未だに恐ろしいものを感じるんです。渋谷とか行くと，坂の上から人が降ってくるんです。この人みんなこっちへ歩いてくるんやと思うと恐くて。基本的には田舎もんなんやな，と思うわけですけども。チャロの気持ちがそんなところに反映されていて，NYでさぞ恐かっただろうなと思うのですが…。

今年の4月に，初めてちゃんとNYに行ってまいりました。ミュージカルを見るために，初めて自分の足で地図を広げて歩いて。すごいところでした。犬はいませんでした。野良犬は確かにいませんでしたし，人が作り，それを人が見に来るための街だと思いました。ビルを見に来る，ミュージカルを見に来る街。人が作ったものを，人が観光する二十世紀が大きくした街だなと思って。日本も昔は東京にビルを見に来る人がいましたが，NYはそれが未だに続いていて，巨大な田舎を抱えている，NYを生涯にて一度は訪れたい場所なのだと思いました。国の考え方の違いに圧倒されて帰ってきたわけですが。本当に碁盤の目になってますので，作った街やな～と思ったし，チャロが迷った場所にも行ってきたんですが，ここに犬おったらすぐ捕まるで，という場所でした。よかった～放送した後で，と思いながら。

時間がきたので，ここでチャロの話を終わらせていただきたいと思います。